

母親らしさと自分らしさの両立における 葛藤と対処方略

——ギャルママの子育てを「ちゃんとする」という実践——

高橋香苗

日本社会における母親像は多様化しつつある。その一方でギャル系のファッションを好む母親、いわゆるギャルママをとりまく現状からは、多様化といってもその許容される範囲には、いまだ限界があるのではないかということが示唆される。母親の役割葛藤に関する研究では、母親としての自己と個としての自己の双方の充実が母親にとって重要であることが指摘され、その不均衡さの問題は母親自身の就業や学歴との関連、あるいは異文化という視点から論じられてきた。しかし、外見のイメージにおける母親らしさと自分らしさを母親たちがいかに両立しているのか、という視点にたった議論は展開されていないという課題があった。こうした課題をふまえ、本研究はファッションにおいても特徴をもつギャルママを対象としたインタビュー・データを分析した。その結果、外見の上では母親らしさではなく自分の好きな格好をする一方で子育ての実務的な面では母親らしいことをとにかく頑張るというギャルママの行動は、外見と役割とを切り離して個としての自己と母親としての自己を両立させる一つの実践であるということが明らかになった。こうしたギャルママの論理は、一見すると新しい母親像の提示であるが、一方で当事者たちは自己犠牲の母親という規範性に疑問を抱いているわけではなく、むしろそれらを参照していることから、そこには保守的な自己犠牲の母親像を強化する働きがあることが見出された。

キーワード：母親の規範性、外見のイメージ、葛藤

1. 問題意識

日本社会における母親の規範や母親に対する社会的な期待は変化しつつある。日本の親子関係は母子の密着が特徴であり、それは母親の自己犠牲的な献身によって支えられてきた（山村 1971）。こうした母親規範には欧米からもちこまれたアタッチメント理論にもとづく育児や母性言説が大きな影響を与えていた（落合 1989）。育児期の母親の自己犠牲の意識は2000年前後の時点でも全体として高いことが指摘されているなど（井上 2003）、自己犠牲の母親像は依然として根強く

共有される母親像であると考えられる。しかし一方で、変化もみられる。女性の高学歴化や就業率の上昇という社会の変化と連動するかたちで、子育てと仕事とを二重に負担し両立することが新たな役割意識となっていく（松田 2001）。あるいは母子の密着が育児不安の要因であることが明らかになってくる（牧野 2005）と、子どもと密着しすぎず自制する母親像がメディアを通じて構築されたりするようになった（津田 2013）。また子どもの教育に苦心し、子どものケアとサポートに尽くす教育ママ像は戦後の日本において支配的な母親像であったが、一方で子どもの教育に関心をもたない「非教育ママ」が存在していることも明らかにされてきた（本田 2004）。仕事をもたず子育てに専念している母親も、自己犠牲や自己献身に支えられた母親の手による子どものケアが望ましいとする近代的母親規範が自明のものではないと認識していること（井上 2013）や、そうした母親が子どもを他人に預けるということも受け入れられつつあることが指摘されている（工藤 2019）。こうした変化の背景には母親のアイデンティティの問題がある。現代の若い母親は、子育て以外にエネルギーを向けられる場所や生きがいが必要であると考える一方で、母親に一任された子育てから逃れることもできないため、自分のやりたいことができないイライラや焦りを感じている（柏木 2001）。このように、母親にとってはかつてのように自己犠牲的な献身によって子どもに尽くすということだけではなく、個としての自分というものも求められるようになったことから、さまざまな母親のあり方が析出され、母親をとりまく規範や意識は変化しつつあることが明らかにされてきた。

そうした変化は母親の外見やファッションといった側面にもみられる。婦人誌『主婦の友』のビジュアル・イメージの変化を分析した落合によれば、1955年頃のファッションが主婦の間ではPTAファッションとして定着し長きにわたって踏襲されていたが、1980年代になると「イメージにおける主婦像の崩壊」（落合 2000：180）が生じる。これは女性たちのライフスタイルが多様化したため、画一的なイメージでは主婦や母親を描けなくなってきたことを意味していると考えられる。またそれまでも主婦や母親を対象としたファッション誌の創刊が模索されていたものうまくいらず、その理由はファッションにかける時間的・経済的余裕が主婦や母親にはないことが要因であると考えられていた（出版指標年報 1996）が、1995年に光文社から創刊された雑誌『VERY』の成功によって30代女性向けファッション誌というジャンルが確立された（橋本 2012）。さらに2000年代に入ると母親をテーマにしたファッション誌も登場し、独身時代のファッション傾向が母親向けの雑誌でも継続される傾向が見出されるようになる（橋本 2014）。また女性雑誌はファッションの系統によって細分化されている（栗田 2008；佐々木 2012）が、その傾向は母親向けのファッション誌にも指摘され

る(高橋 2019, 高橋 2020a)。こうした雑誌の展開は、それだけ主婦や母親のファッションに対する関心が高まっており、ファッションの選択肢が多様化していることを意味している。言い換えれば、母親に対する社会的期待や社会における母親像は外見的なイメージも含んで多様化しているのである。

しかしながら、母親のあり方が多様化するなかにおいても、ギャルママには外見のイメージや共有される価値規範に違いがある。ギャルママとは、1990年代に興隆したギャル文化から派生したもので、ギャルのなかでも子どもをもつギャルのことである。「ギャル」という語は1970年代から使われはじめ、1980年代に一般化した語で、もともとは女子大生を指した言葉であった(難波 2007)。1980年代の女子大生「ギャル」はバブリーな夜遊び空間の中にいたが、それに憧れた女子高生の一部が自分たちを「ギャル」の予備軍として「コギャル」と呼ぶようになる。その一方でストリート・ファッションのLAスタイルを好む女子高生もまた「コギャル」として認識されていった。これらの二つの女子高生を意味する「コギャル」はスカートのミニ化という共通点によって融合し、ギャル・テイストとして普通的女子高生にも取り入れられていくことになった(『別冊宝島』391号1998)。そのようにギャル・ファッションが広く定着していくと、「ギャル」という言葉の意味も変容し、「ギャル」は女子大生や女子高生という意味ではなく、「金や明るい色に染めた髪、日焼けサロンで焼いた黒い肌、派手なメイクや露出の多いファッションを特徴とする10代後半から20代初めの女性」(与那覇・新谷 2008: 152)のことを指す言葉へと変化した。さらにギャル文化を受容する年齢層が上昇拡大していることや母親になっても「ギャル」であるギャルママの登場が指摘されるなど(松谷 2012)、「ギャル」の年齢的な特徴も今や曖昧であると考えられる。つまり今日の「ギャル」とはギャル系の派手なファッションを好む女性のことであり、そのなかでも子どもをもつのが「ギャルママ」である。ギャルママはそのネットワークが強いことや消費における牽引力があること(日経MJ 東京本社 2010年9月1日朝刊など)、あるいは社会貢献意識が高いこと(『宣伝会議』845号, 2012)などで注目を集めていた。またギャルママは子どもの学業達成への期待が少ない一方で、子どもの興味関心を増大させたり主体性や専門性を身につけさせたりするために献身的であることが指摘されている(高橋 2020b)。しかし一方で、ギャルママのライフスタイルは歓迎されるばかりではなかったことも指摘されている(松谷 2012, 石川 2014)。

ファッション系統に合わせて雑誌が展開され、それぞれにイメージが構築されているということは、誌面で紹介される衣服やその組み合わせ方という外見的なイメージはもとより、雑誌を通じて共有される母親像や価値規範は多様化していることが想定される。しかしながら、母親を読者に想定するファッション誌を比

較してみると、雑誌の記事に紹介されている衣服の色やデザイン、丈の長さ、あるいはモデルの髪型は、ギャル系以外の雑誌では、ファッション系統にかかわらず似通っており、雑誌に表象される母親の外見のイメージは没个性的なものである（高橋 2019）。また価値規範についても、おしゃれな自分を維持しつつも家事・育児の担い手であることが共通のイメージとして掲げられている一方で、ギャル系以外の雑誌には共通してみられた子どもの学業に積極的に関与すべきであるという価値観がギャルママ誌には見出されないが、ほかの雑誌に比べて家事の愛情表現としての側面が強調され、節約志向が高く、子どもの持ちものを手作りするという意識が投影されているという特徴がある（高橋 2020a）。つまり雑誌の表象からみるギャルママは、ファッションに関心の高い母親たちのなかでも、外見のイメージも家事や育児に対する意識もほかとは異なる特徴的な存在であることが明らかにされてきた。こうしたメディア研究の知見は、多様化が今日のトレンドである一方で、依然として母親らしさや母親の規範性は共有されており、規範からの離脱が許容される範囲にはいまだ限界があるのではないかということを示唆している。

依然として母親らしさや母親像の枠組みが存続している状況のなかで、当事者であるギャルママは「違う」ということをどのように捉えているのだろうか。育児期の母親の心理学的課題は、それまでの自己と新しく獲得する親としての自己を統合していくことである（武内 2002）が、その過程では社会的な母親らしさやイメージが指標となる一方で、自身がそれに合致してないと感じられると子育て不安が助長されることが指摘されている（片山・奇 2007）。母親向け雑誌を資料とするメディア研究の知見（高橋 2019, 高橋 2020a）をふまえれば、ギャルママも社会的な母親らしさととのずれを認識し、そのことによる不安を抱えているのではないかと考えられる。ギャルママはメディア研究が示唆するような「違い」を感じているのだろうか。そうであるならば、そうした「違い」に対してどのような考えをもっているのだろうか。雑誌の比較によってギャルママの服装（高橋 2019）、家事・育児（高橋 2020a）をポジショニングしようとしたメディア研究やギャルママの子育て実践自体に焦点を当てた既存研究（高橋 2020b）に対して、本研究はギャルママのインタビュー・データから当事者らの経験や論理を検討し、ギャルママがギャルママであることを実践する意味やそこでの葛藤を探ることを通じて、外見への意識も含めた母親をとりまく規範性の全体像を捉えようと試みるものである。

2. 先行研究の整理と本研究の意義

母親であることと個としての自己とを母親たちはどのように受けとめているかということについて議論した既存研究を概観し、その限界と課題を整理する。

育児期の女性は、わが子に必要とされるという「母親としての自己」と社会や職場で必要とされる「母親として以外の自己」が充足されることを望んでいる(山崎 1997)。こうした個としての自己と母としての自己の統合の程度には「未熟群」「個人中心群」「母親中心群」「統合群」の4つのパターンがあり、双方の自己の均衡がとれている統合群は個としての自己と母としての自己との葛藤に対して主体的にとりくむことによって二つの自己の統合に成功しており、ほかのパターンに比べて育児の困難さの程度が低い(豊田・岡本 2006)。このように母親としての自己と個としての自己の双方の充実が母親にとって重要であり、そのバランスをとることが重要だということが指摘されてきた。

母親であるということと個としての自己の不均衡さという問題は、これまで主に母親自身の就業や学歴との関連、さらに近年では異文化という視点から論じられてきた。まず就業については、子どもは母親の手で育てるべきだという考えかた、いわゆる三歳児神話があるため、それに反して就業することが母親の葛藤につながっている(濱田 2005)。それに加えて社会のシステムとしても母親の就業が子どもの教育に不利な条件として作用している(喜多 2012)ために、育児期の母親が子育てに専念するのではなく就業するということが母親としての役割と個人としての生きかたとの間で葛藤することになっている。しかし一方で育児に専念している専業主婦とはいうと、自身のキャリアを中断していることに対する葛藤から、自己承認を外部から得るために掲げた目標のために邁進しており(吉本 2018)、子育てが目的化していることも指摘されている。学歴については、高学歴の母親ほど子どもにできるだけのことをしてやるべきだといった「良い子育て」という意識が強いことが明らかにされていること(西村 2001)に加え、高学歴な母親は自己犠牲的な意識に同意しない傾向にあることから学歴が高いほど葛藤が大きいのではないかと論じられている(井上 2003)。さらには異文化適応として、子育てに対する意識や環境が日本とは異なる国や地域から来日した人々が日本社会の母親規範に対して抱える葛藤や適応の過程が明らかにされてきた(マルティネスほか 2012; 孫 2019)。このように、高学歴化や女性の就業率の上昇といった日本社会の変動を背景に、就業の有無や学歴といった分析枠組みで議論が展開されてきた。特に日本では高学歴な女性の専業主婦化という現象があり、そのことに対する研究関心も高かったことが指摘されている(本田 2008)。

既存研究による優れた知見が残されているものの、外見のイメージにおける母

親らしさと自分らしさを母親たちがいかに両立しているのかという視点にたった議論は展開されていないという課題がある。特に現代社会では自分らしさが求められており、それを表明する道具としてのファッションが問題となっている。1990年代後半からは自分の好きなことをすることをよいことだとする自分らしさのイデオロギーが浸透しているが（山田 2005）、なかでもファッションは自己表現のシステムであり、自分らしさが求められる現代社会ではそれを表現するためにファッションに依存せざるを得ない（河原 2005）。たしかに落合が指摘するように主婦や母親の外見的なイメージは変わりつつある（落合 2000）が、母親の役割という枠組みのなかでは女性としての慎みやしおらしさを体現するような行為をすることが有用であるため母世代の外見的なおしゃれに対する志向は低いという指摘（橋本ほか 2006）や、雑誌の表象という点でも依然として母親らしさの枠組みは残されていることが示唆されている（高橋 2019）。このような状況下では、母親にとっても自分らしさを表明する道具としての外見のイメージやファッションというものの重要性が高まっている一方で、母親らしさと両立における葛藤や両立を図る方略があると考えられる。それにも関わらず、外見のイメージやファッションにおける母親としての自己と個としての自己は問題として扱われてこなかった。本研究が外見のイメージやファッションという側面でも特徴をもつ集団であるギャルママを分析対象とすることで、母親らしさと自分らしさの葛藤という問題に対して、外見のイメージやファッションというこれまで焦点を当てられてこなかった部分の一端を捉えることが可能になると考えられる。

3. 調査の概要

本研究では、2019年8月から10月にかけて、ギャルママのライフスタイルに関する調査として実施したインタビューの一部を用いる¹⁾。調査地は東京と大阪・奈良で、調査対象者はスノーボール・サンプリングによって選ばれた11名のギャルママである。スノーボール・サンプリングはギャルママと企業の共同プロジェクトのまとめ役に紹介してもらった方々を起点とし、その友人を紹介してもらうことで数を増やしていった。調査は半構造化インタビューで実施し、①ファッション、②子育て・家族、③周囲との人間関係、④ギャル・ギャルママに対する意識など、調査協力者の生活について幅広く質問をした。本研究では、自分たちの「違い」を感じているのか、どのようなところに感じているのか、そしてそれをどのように捉えているのかがうかがえる項目である③周囲との人間関係、および④ギャル・ギャルママに対する意識から、「周りのお母さんと比べて自分のことをどう思いますか」「世間的なギャルママのイメージはどのようなものだと思いますか」

いますか」「それについてどう思いますか」「ギャルママとはどういう人たちだと思えますか」などの質問に対する語りをデータとして用いた。一回あたりの所要時間は90～120分間で、調査の日時や実施場所は協力者の生活への支障が少なくなるよう配慮した。インタビューを始める前に、調査の目的、調査への協力は自由意志に基づくものであること、協力を断っても不利益を被らないこと、協力する場合にも協力の中止や回答の拒否等をして不利益は生じないこと、個人のプライバシーへ十分に配慮すること、調査内容は学術目的でのみ利用することについて書面と口頭で説明し、インタビューの録音とインタビュー内容を学術的な発表の場で引用することへの許諾を得た。音声データから逐語録を作成し、これを一次データとした。

表1に調査協力者の概要をまとめた。調査時点での調査協力者の年齢は33～39歳で、みな1980年代生まれであるため、ギャル文化をリアルタイムに受容することができた世代である。調査協力者のうち8名はギャルママ雑誌を購読したことがあり、また8名はギャルママサークルや企業とギャルママとの共同プロジェクトに参加して活動していた経験がある。調査協力者の第一子出産時の平均年齢は25.1歳であり、のちに別離を経験した1名を除く10名の夫の第一子出生時の平均年齢は27.9歳であった。調査協力者は21～32歳の間に出産し、調査協力者のうち7名は妊娠先行型の結婚を経験している。調査協力者には1～3人の子どもがおり、全員に男児がいる。それぞれの夫は会社員として就業するか、もしくは自営業者である。経済的な状況としては、世帯年収は200～400万円の世帯が2事例、400～600万円の世帯が5事例、600万円以上の世帯が4事例であった。別離を経験している1名を除いた調査協力者の夫婦の教育的背景は、高校中退・卒業同士の同類婚カップルが6事例、調査協力者は高校中退・卒業で夫は

表1 調査協力者の一覧

	年齢	職業	学歴		第一子の出産年齢		子ども数	ギャルママ誌を購読した経験	サークル等に参加した経験	
			本人	夫	本人	夫				
A	34	専業主婦	専門学校中退	大学卒業	23	26	妊娠先行	3	○	○
B	35	エステティシャン	高等学校中退	—	24	—	妊娠先行	1	○	○
C	33	結婚相談所職員	高等学校中退	大学中退	25	23	妊娠先行	2	○	○
D	32	専業主婦	専門学校卒業	高等学校卒業	25	32	妊娠先行	3	○	—
E	34	インスタグラマー	専門学校中退	高等学校卒業	26	32	妊娠先行	2	○	○
F	38	イベント運営者	高等学校卒業	高等学校卒業	27	31		2	○	○
G	35	専業主婦	高等学校中退	大学中退	32	32		1	—	—
H	34	専業主婦	高等学校卒業	高等学校卒業	23	22	妊娠先行	2	○	○
I	36	メイクアップアーティスト	専門学校卒業	高等学校卒業	23	29		3	—	○
J	39	飲食店店員	短期大学卒業	大学卒業	27	31		2	○	○
K	32	ゲームセンター店員	高等学校中退	高等学校中退	21	21	妊娠先行	3	—	—

大学中退・卒業という上昇婚カップルが4事例であった。

4. 分析

逐語録のすべてを対象にコーディングし、①ギャルママはどのようなことに葛藤を感じているか、②ギャルママは葛藤をどのように乗り越えているか、の2点について、コードを集約し、集約されたコード、およびそのデータを再文脈化することで彼女たちの価値観と論理がどのようなものであるか検討した。なお調査協力者たちの語りを引用するにあたって、個人の特定に繋がりうる情報やプライバシーに関わることは削除、あるいは、別の表現に差し替えるなどした。また意味を変えない程度で「てにをは」を修正した箇所がある。括弧内は筆者による補足である。表2は、調査協力者がもっている母親としての違和感とその違和感に対する考えをまとめたものである。

4-1. 自分らしさの追求と母親役割との葛藤

4-1-1. ほかの母親たちとの違和

調査協力者が日頃から仲良くしているママ友達は、学生時代からの友人やママ

表2 母親としての違和感と違和感に対する考え

	母親としての違和感		違和感に対する考え		
	周囲の母親との間で感じる自分との違い	誰に否定的な言動を向けられたことがあるか	ギャルママに対する世間のイメージ	「ちゃんと」している「ちゃんと」すればよい その他	
A	自分が服装を合わせている	子の同級生の保護者	よくわからない	同じ母親としてみて欲しい	
B	周りの人は普通におばちゃん	SNSのフォロワー	悪いと思う 子育てできていない	ちゃんと子育てしている	言いたい奴は言っとけ
C	ファッションも考え方も違う	両親、義理の母親	良く思われてない 家事できていない	やることやっていればよい	そう思う人は思ってくれて良い
D	見た目の雰囲気違う考え方が古い	医者 子の同級生の保護者	良く思われてない 何もできない	中身を知ってから言え	
E		近所の人 見知らぬ人	受け入れられてない 子育てしていない	外見だけで言われたくない	否定的な態度をとられても 気にならなくなった
F		見知らぬ人 電車の乗客	良く思われてない しつげができていない	努力をしている	温かい目でみて欲しい 理解してもらうのは難しい
G	おしゃれではないが、きちっとはしている	見知らぬ人	良く思われてない	しっかりやっている	
H	自分の服装が浮くことがある	友人が経験をした	良く思われてない	ちゃんと子育てしてればよい	しょうがない
I	違うなと思う周りは好きな服をきていない	友人が経験をした	印象として良くない ノリで子育てしている	ちゃんとしていけばよい	母親とはこうだ、という考えが 社会にあることが良くない
J	自分が服装を合わせている	友人が経験をした	良く思われてない 子育てできてない	できてない人はごく一部、偏見	やりたいように やっているだけ
K	見るからに違う		良く思われてない	見た目で決めつけるな	

サークル、SNSを通じて知り合った人である。そうしたママ友達は自分と似たような雰囲気であると調査協力者は感じている。その一方で、調査協力者は子どもの幼稚園や小学校を通じて知り合う母親には違和を感じている。実際に人間関係への入っていきにくさを感じていることに加えて、メディアや友人の話からつくられた「母親同士の関係は複雑で面倒だ」という先入観があるため、その中に入りたいとは思えないのである。そのため表面的には良好な関係を構築しているが、深入りはせず、自分と気の合う人同士で親密な関係を構築している。保護者同士の関係の中で感じる違和についての協力者Dの語りを引用する。

>小学校とかのママたちとどういうところが違うなって思うの？

D：見るからにやんな。歳は上。見た目の雰囲気も全然違う。

>見た目の雰囲気が違うって、向こうはどんなふうなの？

D：おばちゃん。見た目がおばちゃん。私にはできないっていう、
本当に違うような人やんな。考えが古い。

このようにDは小学校のほかの母親は見た目が「おばちゃん」で、自分とは見るからに違う雰囲気であると感じている。協力者Hも同様に「おばちゃん」みたいな人が多いと言及したうえで、個人的に仲良くしたいとは思わないので表面的な関係に留めるのだと語っている。つまりDやHは「おばちゃん」という表現を使いながら相手と自分を外見という点によって対比させているが、「おばちゃん」のような見た目とはどのような意味なのだろうか。周囲の母親の外見に関する協力者Gの語りを手掛かりにしたい。

G：おしゃれしてる人っていうか、きちっとしてる人は最近やっぱ多いかな。おしゃれかどうかでなくて、ちゃんと一応きちっとメイクしてるみたいな。昔みたいに抱っこしておんぶして、すごいどすっぴんでみたいな人は、すごい減ってるような気がします。

このようにGは、おしゃれかどうかはさておき、身だしなみはきちんとしているのが周囲の母親であると考えている。さらにいえば、昔の母親というのは化粧も全くしていないものだったというイメージをもっている。もちろんDとH、Gが同一人物のことを指して話しているわけではないが、身だしなみの範疇を越えていない母親たちとおしゃれをしている自分たちギャルママという関係性がそこにあると推察される。

4-1-2. 批判的な言動を向けられた経験

外見という点は、調査協力者が周囲の人々から向けられる言動の解釈においても重要となる。表2からもわかるように、調査協力者のうち7名は他人から自分の外見や子育てについて批判的な言動を向けられた経験がある。自分自身にはそうした経験がないという調査協力者も、友人がそのようなできごとによって遭遇したことがあると話す人もいた。さらには、表2にあるように、ギャルママに対する世間のイメージも良い印象ではないと考えている。こうした経験のなかで、なぜ自分や自分の友人がそうした言動を向けられるのかということ調査協力者が解釈するとき、要因に外見が挙げられる。子ども連れで外出すると見知らぬ人から批判的な声をかけられたという協力者Eの語りを引用する。

E：私もちよっと見た目が派手っていうのもあって、「ちゃんと育てろよ」とか結構心ないこと言われたりとかっていうのがすごく悔しくて。(子どもに)めばちこ²⁾ができてしまったときに、私の見た目だけで「虐待しているんちゃうか」って言われたりとか。

このようにEは自分の外見が派手であるから厳しい言葉をかけられるのだと解釈している。もちろん、調査協力者のなかには外見を指して批判された経験がある者もいる。病院での医師との会話について話すDの語りを紹介する。

D：私、すごい傷ついたことがあって。上の子を出産してから初めて病院に連れて行ったときに、診察室に入ったときに、すぐに「今日はどうしましたか？」って聞かれると思ってたら、一番最初に言われたのが「お母さん、主婦してないね」「お母さんしてないね」って、ぼんって言われて。「え？」ってなって。「え、なんでですか？」って言ったら、「そんなネイルしてると子育てやってないよね。料理もできないよね」って。ぼんって言われたことにすごいショックで。「え？」って思って。「何も知らんのに何？」って思って。

このように調査協力者には外見のことを指されながら、そのような外見の母親に育児ができていないのか、虐待しているのではないかという疑念を向けられたという経験もある。こうした周囲との相互作用のなかで、調査協力者は自分の外見が母親として異質なものとみなされることを自覚し、批判的な言動を向けられる原因はそこにあると解釈していく。また他方で調査協力者の語りから【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】という社会のまなざしがあることが示唆される。

4-1-3. 自分のことよりも子どものことを優先するべきだという規範

調査協力者が外見による差異という解釈をすることは、裏を返せば、母親という存在は自分のように外見が派手ではいけないという意識が彼女たちにあることを示唆している。たとえばEは、誰かに教えられたり言われたりしたわけではないが「親だから派手にしちゃいけない」ものだと考えていたと語っている。また協力者Fは自分たちが髪の毛を巻いたり、つけまつげをつけたりすることに対して、「親になったからには、自分のためではなく子どものために時間もお金も使うべきだと思われてしまう」というふうに語っている。このような語りから「母親になったからには派手にするべきではない」「母親自身の外見のことよりも子どものことを優先すべきである」という意識が一般化しており、さらに調査協力者自身もそうした規範意識を共有していることが指摘できる。協力者Gは「お母さんなのだから」と叱られたことについて語っている。

G:「お化粧何分かってんの?」「子ども、その間どうしてんの?」みたいな。「子どもの面倒みてんの?」みたいな感じで言われたりとか。「(お化粧は)ちゃっちゃっちゃとして、子どもにもっと時間使ってあげな。お母さんやねんから」「お母さんやねんから」という言葉は何回か言われたかな。

このようにGは周りの人に「母親なのだから」自分の化粧に時間を使うのではなく、子どものことをするべきだと諭されている。つまり【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】という構図の母親らしくない外見には労力、時間、金銭が投下されているという前提がある。これらは有限なものであるため、母親らしくない外見をすることは相対的に子どもへの投下量を減じる行為であると捉えられる。このことがギャルママを自己犠牲の母親という規範から逸脱しているとみなす要因となっていくのだと考えられる。

4-1-4. 好きなように好きな格好をしたいという欲求

服装を含めて「母親は自分のことよりも子どものことを優先するべきだ」という規範意識が共有されている一方で、それに従いきれないという葛藤が調査協力者にはある。協力者Cは、義理の母親から外見について否定的な言動を向けられた経験を語った上で、次のように発言している。

C: 見た目ですら判断されがちじゃないですか。たとえば第一印象とかもあるんで。(義母の) そういう気持ちもわかるし。けど、自分のしたい、やりたい、好きなようにしたいっていう気持ちもあるから。自分のやりたい気持ちを抑えるのもど

うかなって思うんですけど。

Cは母親として服装や外見を改めなければならないと考えているだけでなく、それが他者からも求められていることを理解しているが、では自分の好きなようにおしゃれをしたいという欲求はどのように解消すればいいのかという困惑した気持ちを吐露している。

調査協力者は自身を外見の点で周りの母親とは異なると考えており、そうした考えを補強する他者からの指摘や批判も経験している。外見が論点なのだと考える背景には「母親は派手な服装をしてはいけない」「母親自身のことよりも子どものことを優先するべきだ」という規範意識を共有していることがある。さらにこれは一般化された意識であることが調査協力者の語りの端々から推察される。裏を返せば、有限な時間や労力、金銭を母親自身の外見に投資することが相対的に子どもへの投資を少なくすることだとみなされるのである。そのため調査協力者はギャルという外見であることによって【母親らしくない外見の母親＝子育てができない母親】という関係に落としこまれていく。それゆえ彼女たちは自分の好きなスタイルを変えなければならないのかと考えるが、それと同時に、そのように自分の欲求を押し殺すことが良いことなのか、と自問し葛藤していた。

4-2. 葛藤の対処方略

4-2-1. 子育てを「ちゃんとする」ことによる批判の回避

ほかの母親との違いを自覚し、さらには否定的な印象をもたれていると考えているが、それに対して調査協力者は、子育てを「ちゃんと」すれば良いと考え、実際に自分たちは子育てを「ちゃんと」やっていると考えている。すなわち調査協力者は、【母親らしくない外見の母親＝子育てができない母親】という見方を覆そうとするときに、外見を変えろという方法ではなく、子育てを「ちゃんとする」という行動を選択するのである。

H：(ギャルママに対して良くないイメージがもたれているのは)普通というか、致し方ないというか、別にそれはしょうがないと思う。どんな格好をしても行動がちゃんとしてればいいんじゃないって私は思うんで。そういう言い方しないでよ、見方しないでよってギャーギャー言うんじゃないで、ちゃんとしてればいいんじゃないっていう。別に(そんな見方をしないで)言わなかったって、ちゃんと子育てしてればいいし。そうやって言われたくないんだったら、見た目で言われたくないんだったら、行動でちゃんとすればいいし。

Hは自己犠牲の母親という規範意識に基づいたギャルママへの否定的なまなざし自体を変えようということではなく、育児という行動を「ちゃんと」していれば良いのだと主張し、そうすることで【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】という関係を覆すことができると考えているようである。つまり、子育てにおいて問題が生じれば、それは【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】を立証することになってしまうため、「ちゃんとする」ことによって、子育てができていないと思われるような事態を回避し、【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】という捉えかたが誤りであることを示す必要があると考えているのである。こうした調査協力者たちの考え方は、ギャルママが既存の母親らしさや自己犠牲的な母親像を脅かす存在というわけではなく、むしろ既存の枠組みのなかでいかに対処しようとしているかを示唆していると考えられる。

調査協力者は「ちゃんとする」という方法によって【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】を変更しようと試みているため、他者の否定的な言動に対しては育児の中身を評価してほしいと主張する。

D：中身を知ってから言えよ、みたいなの。できひん人もおるかも知れんけど。「お弁当もできひんやろ」とか「家のことやってどうせできひんやろ」とか「ほんまに子どものご飯とかちゃんとしてんの?」とか、常識とかもそうやし、「TPO 考えれてんの?」とか。そう思うやろけど、見てから言って?みたいなの。

このようにDは、自分の外見によって育児ができないと決めつける自分たちに向けられる世間のまなざしに対して、育児の実態をみてほしいと主張している。さらにいえば、こうした発言から自身の子育てに対する不安や自信のなさはあまり読みとれない。一方で、こうした文脈のなかで、なにをどれくらい、どのようにすることが「ちゃんとする」ということなのか、その具体的な達成水準については明言されていないことが指摘できる。つまり調査協力者にとっての子育てを「ちゃんとする」ということは、問題のある母親だと思われぬように、外見以外の部分で、母親らしいと思われることはなんでもがんばることが子育てを「ちゃんとする」ということであると推察される³⁾。

調査協力者は、【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】というステレオタイプに対峙するとき、子育てを「ちゃんとする」という行動によってそれを【母親らしくない外見の母親≠子育てができない母親】に変更させようと試みている。そのため外見ではなく自分の子育てをみて評価してほしいと主張するのである。そうすれば、外見では差異化されても母親としての役割を果たすと

いう点においてはほかの母親と違いがないということ了他者にわかってもらえると考えているからである。調査協力者は自身の子どもの関係性や生活の様子、あるいは為人が伝わることによって周囲の人々から肯定されることを経験しており、このロジックは成功している側面もある。ただし、このロジックは外見による違和を感じるほど、がんばることをがんばらなければならなくなる危うさを孕んでいるといえる。

4-2-2. ほかの母親が諦めたおしゃれをしているという自己肯定感

子育てを「ちゃんとする」一方で自分の好きな服を着ているということに対して、調査協力者はほかの母親が諦めたおしゃれまでしているという自己肯定感を得ている。ギャルママとはどのような母親だと思うかという問いに対する協力者Bの語りを引用する。

B：みんな自分のことばかりやってるんじゃないくて、自分のこともやりつつ、子どものこともちゃんとやってるのは、すごい（すごくそう思う）。子ども子どもってならず、自分自分ともならず、みんな輝きたいんじゃないかなって思う。ママになったからこれができひん、子どもがおるからできひんって諦めるんじゃないくて、できる方法を探すみたいな感じでみんなやってるとは思うんで。向上心の塊みたいな感じの。（そういう感じ）で自分はやってる。人生一度きりやから、我慢とかして自分を抑えて生きていくのってもったいないなって思うから。どうやったらそれができるかっていう方法を常に考えてるかな。

Bは、子ども中心でもなく、自分中心でもないバランスの取れた状態が自分たちギャルママなのだと考えている。さらに一般的に母親であれば自分の好きな服装をすることを諦めてしまうが、自分はどうすれば母親であることとギャルであることが両立できるのか、諦めずにその方法を考えて実践していると主張する。こうした語りから、他の母親が諦めていることを自分たちは実現しているのだという自負が読みとれる。

さらには、他の母親が諦めてしまった自分の好きな服を着るということの実現が、一方で子どものことを蔑ろにするような事態を招いているわけではないという意識もある。

F：やってる本人たちからしたら、子どもがちょっとテレビ観てる時間に（髪を）巻いてたりとか、一人で遊んでる時間に一生懸命やったり、起きたらややこしいから寝てる間に早く起きて用意したりとか、そういう努力をしてるんですけ

ど、それはほかの人からしたら全然わからないんで。

このように、すきま時間を活用したり、自分の睡眠時間を削ったりして自分のための時間は捻出されているため、子どもと向き合わなければならない時間を自分のために使っているわけではないと考えている。経済的な部分についても、独身時代よりも安いものを購入したり、購入数を減らしたりして、許される範囲で工夫しながら楽しんでいるのだと調査協力者は説明する。時間の使い方でも、お金の使い方でも、調査協力者は自身の努力と工夫によって子どものことを軽んじるような状況が生じることはないと考えている。

調査協力者は、【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】というステレオタイプに屈して自分の好きな服を着るというおしゃれを諦めるわけではなく、母親として育児を「ちゃんとする」ことによって、それを【母親らしくない外見の母親≠子育てができない母親】に訂正しようとしている。それだけではなく、母親としての役割を果たしているという意識とほかの母親が諦めたおしゃれをしているという意識は彼女たちの自己肯定感を高めているようである。また一部の調査協力者は自身らに対する否定的な言動やイメージに対して「言いたい奴は言っとけ」「そう思いたいなら思ってくれて良い」という考えをもっている。こうした彼女たちの強さの裏側には自己肯定感があり、それが他人に否定されても構わないという強いアイデンティティを支えているのだと考えられる。

5. 考察

ギャルママが周囲との関わりあいのなかで、母親としての「違い」を感じているのか、そうであるならばそれに対してどのような考えをもっているのかを当事者らの経験や論理を通じて検討した。その結果、調査協力者は外見における母親としての違和を感じていることがわかった。一方で【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】という意識が社会的にはあり、調査協力者はその文脈のなかで理解されてきた。こうした見方やイメージは調査協力者にも内在化されている。その根底には、母親は子どもに尽くすべきであるという自己犠牲の母親という規範がある。つまり有限な労力、時間、お金を自らの外見に投資していることは相対的に子どもへの投資を減じることだとみなされるのである。調査協力者はこうした意識の一方で自分の好きな服装をしたいという欲求を抱え、その間で葛藤していた。これに対して、彼女たちは「ちゃんとする」ことによって子育てに成功し、【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】というステレオタイプに対抗しようとしていることが明らかになった。そうして葛藤に向き合うことは、ほかの母親が諦めてしまった自己実現としてのおしゃれをしながら、

一方では母親としても「ちゃんと」しているという自信になり、強いアイデンティティを支えていた。

これらの結果から、ギャルママのギャルでありママであるという行動は外見と役割とを切り離して個としての自己と母親としての自己を両立させる一つの実践であることが示唆される。たしかに自分の志向性に従った服装をするという行動自体はある。しかしながら、そこには子育てを「ちゃんとする」という意識や行動が伴っており、それによって【母親らしくない外見の母親=子育てができない母親】というステレオタイプを覆すことが試みられている。これは自分たちの被服行動やその結果としての外見と母親としての役割とを切り離そうとする試みであり、これによって母親としての役割と自分らしさを両立させようとしていると考えられる。こうしたギャルママの試みは、ギャル系ファッションへのこだわりだけではなく、ほかの母親が諦めているファッションを通じた自己表現をしているという喜びや自信に支えられていることが示唆される。ギャルママは子育て実践においても献身さが見出されていたが（高橋 2020b）、それは外見と母親としての役割とを切り離そうとする試みが背景にあるからだと考えられることができる。

さらにいえば、ギャルママは自己犠牲の母親という規範性やそれに紐づく母親らしさのイメージそれ自体に疑問を抱き、それを改変しようとしているわけではない。むしろ既存の母親らしさのイメージや規範性の枠組みのなかで、どのように振舞えば母親としての正統性を示すことができるのかを考えている。つまりギャルママは既存の価値観と対立しているというよりも、自己犠牲的な母親の規範を参照しながら、よき母親であることと自分らしさを両立しようとしているのだといえる。そうした意味では、ギャルママは外見のイメージにおける違いがあり（高橋 2019）、また当事者らもそのような認識をしているが、内面化された母親規範は保守的であるといえるだろう。これはギャルママ向けの雑誌では愛情表現としての家事が強調され、手作り規範や節約志向があるというメディア研究の指摘（高橋 2020a）とも重なり合うものだと考えられる。つまり、ファッションにおける自分らしさを追求する代わりに子育てを「ちゃんとする」というギャルママの論理は、一見すると自己犠牲の母親像から距離をとろうとコントロールする新しい母親像の提示ではあるが、それと同時に保守的な母親像を強化しているのではないだろうか。

また、外見や服装は自己表現であるとともに他者から見られるものでもある。そのためギャルママがいくら子育てを「ちゃんとする」という論理のもとで外見と母親の役割とを切り離そうとしても、他者から読みとられる情報は「ギャルである」ということでしかない。特に日頃からの関係性がない人ほどギャルママの行動の意図を汲みとることは難しい。そのため子育てを「ちゃんとする」ことで

母親としての正統性を示そうとしても理解が得られず、理解が得られないからさらに子育てを「ちゃんと」しなければならなくなるというスパイラルに陥る可能性が考えられる。つまり子育てを「ちゃんとする」という論理にはギャルママ自身を追いこんでしまう危険性が内包されている。

ギャルママの葛藤に注目することで、依然として母親らしさという外見のイメージが規範として存在しており、被服行動とその結果としての外見においても自己犠牲的であることが母親の規範性としてあることが示唆された。一見そうした既存の価値観から自由にみえる母親であるギャルママも、実のところ既存の枠組みに絡めとられている。母親には自己犠牲的であることが求められ、それは外見においても表現されていかなければならないという強いプレッシャーは存在し続けているのだ。

(たかはし かなえ 明治大学大学院)

謝辞：インタビューに協力してくださった11名のギャルママとギャルママとの橋渡しをしてくださった方のおかげで本研究は完遂いたしました。また複数の匿名の査読者からいただいた貴重なコメントによって本稿は大幅に改善されました。ここに記して心から感謝申し上げます。

[注]

- 1) 同じインタビュー調査を用いた研究には高橋(2020b)があるが、本論文とは異なるデータを使用したものである。
- 2) 関西地方の方言で「ものもらい(麦粒腫)」のことを指す。
- 3) ギャルママが子育てや教育について具体的な考えをもっていないというわけではない。ギャルママの子育てに対する意識と実践については高橋の議論がある(高橋2020b)。

[引用文献]

- 濱田維子 2005 「仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響」『日本赤十字九州国際看護大学』3, 147-158
- 橋本嘉代 2012 「ライフスタイルの効果と女性雑誌——1970年代以降のセグメント化に着目して」吉田則昭・岡田章子(編)『雑誌メディアの文化史——変貌する戦後パラダイム』森話社, 164-188
- 橋本嘉代 2014 「現代の母親向けの新雑誌にみるロールモデル——“ワーク”と“ライフ”の描かれ方に注目して」『出版研究』(45), 181-202
- 橋本幸子・小田貴子・土肥伊都子・柏尾眞津子 2006 「おしゃれの二面性尺度の作成及ジェンダー・パーソナリティとの因果分析——母世代・娘世代の比較」『社会心理学研究』21(3), 241-248
- 本田由紀 2004 「『非教育ママ』たちの所在」, 本田由紀編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』勁草書房, 167-184
- 本田由紀 2008 「『家庭教育』の隘路」 勁草書房

- 井上清美 2003 「母親の『自己犠牲』規範意識の趨勢と規定要因」『年報社会学論集』(16), 150-161
- 井上清美 2013 『現代日本の母親規範と自己アイデンティティ』 風間書房
- 石川由香里 2013 「雑誌から読み解く育児する母親像——『よき母親』とセクシュアリティの両立可能性」『活水論文集・健康生活学部編』56, 25-38
- 柏木恵子 2001 『子どもという価値——少子化時代の女性の心理』 中央公論新社
- 片山綾子・奇恵英 2007 「母親の自己イメージと育児不安に関する研究」『臨床心理学』(4), 15-20
- 河原和枝 2005 『日常からの文化社会学——私らしさの神話』 世界思想社
- 喜多加実代 2012 「家庭教育への要請と母親の就業——母親の就業を不利にする教育のあり方をめぐって」宮島喬・杉原名穂子・本田量久(編)『公正な社会とは——教育, ジェンダー, エスニシティの視点から』 人文書院, 118-137
- 工藤遙 2018 「『子育てでの社会化』施策としての一時保育利用にみる母親規範意識の複層性」『福祉社会学研究』15, 115-138
- 栗田宣義 2008 「ファッション系統の社会学」『甲南大学紀要 文学編』(165), 129-139
- 牧野カッコ 2005 『子育てに不安を感じる親たちへ——少子化家族のなかの育児不安』 ミネルヴァ書房
- マルティネス真喜子・畑下博世・河田志帆・金城八津子・植村直子 2012 「労働目的で来日した在日本ブルー人女性の生活と育児」『日本地域看護学会誌』15(2), 97-106
- 松田茂樹 2001 「性別役割分業と新・性別役割分業——仕事と家事の二重負担」『哲学』106, 31-57
- 松谷創一郎 2012 『ギャルと不思議ちゃん論——女の子たちの三十年戦争』 原書房
- 難波功士 2007 『族の系譜学——ユース・サブカルチャーズの戦後史』 青弓社
- 西村純子 2001 「性別分業意識の多元性とその規定要因」『年報社会学論集』(14), 139-150
- 落合恵美子 1989 「現代の乳幼児とその親たち——母子関係の神話と現実」三沢謙一ほか編『現代人のライフコース』 ミネルヴァ書房, 1-5
- 落合恵美子 2000 『近代家族の曲がり角』 角川書店
- 佐々木孝侍 2012 「ファッション誌と瘦身志向」『マス・コミュニケーション研究』(80), 231-248
- 孫曉英 2019 「在日華僑華人の家庭教育に関する一考察——育児環境と母親の葛藤を焦点に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』27(1), 37-46
- 高橋香苗 2019 「女性誌のフォーマル・ファッション記事からみる母親の規範——ギャルママのファッションは逸脱なのか」『家族研究年報』44, 43-60
- 高橋香苗 2020a 「育児期の母親を読者とするファッション誌における家事・育児の価値観——ギャルママはなにが異なるのか」『情報コミュニケーション研究論集』(18), 1-19
- 高橋香苗 2020b 「ギャルママの子どもに対する期待と子育ての方針——教育を含む子育て実践に着目して」『家族関係学』39, 29-41
- 武内珠美 2002 「妊娠・出産・子育てをめぐる女性の心理と問題」岡本祐子・松下美知子編『新女性のためのライフサイクル心理学』 福村出版, 151-172
- 豊田史代・岡本祐子 2006 「育児期の女性における『母親としての自己』『個人としての自己』の葛藤と統合——育児困難との関連」『広島大学心理学研究』(6), 201-222
- 津田好子 2013 「NHK教育『おかあさんの勉強室』が描いた1980年代の幼稚園児と母親規範」『東京女子大学紀要論集』63(2), 141-163
- 山田昌弘 2005 『迷走する家族——戦後家族モデルの形成と解体』 有斐閣

- 山村賢明 1971 『日本人と母——文化としての母の観念についての研究』(第3版) 東洋館出版社
- 山崎あけみ 1997 「育児期の家族の中で生活している女性の自己概念——母親としての自己・母親として以外の自己の分析」『日本看護科学会誌』17(4), 1-10
- 与那覇里子・新谷周平 2008 「弱くなる『ギャル』——『強めの鎧』と『がんばる』という適応」, 広田照幸編 『若者文化をどうみるか?——日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー, 150-176
- 吉本文子 2018 「『完璧』を目指す選択と評価のはざままで——専業主婦の母親の子育て観を中心に」『共栄大学研究論集』(17), 99-113
- 全協・出版科学研究所 1996 『出版指標年報』 全国出版協会出版科学研究所
- 「コギャルの興隆史を解剖する」『別冊宝島』391号 1998年6月1日, 68-80
- 「ギャルママ、ヒントの宝庫、調査が語る消費パワー、瞬発力・影響力大きく」『日経MJ』東京本社 2010年9月1日朝刊, 1
- 「ボランティアの参加経験率は9割! ギャルママは社会のために役立ちたい」『宣伝会議』845号 2012年9月15日, 19

(2021年9月18日掲載決定)

Conflicts and Coping Strategies in Balancing Motherhood and Self-identity: Gal-Mamas' Practices of "Doing Their Best to Be a Mother"

TAKAHASHI Kanae

(Meiji University)

The image of mothers in Japanese society is becoming increasingly diverse. However, the current situation surrounding “gal-mamas” who wear flashy clothes and makeup suggests that there may still be a limit to the range of what can be tolerated by society, even in the face of diversification. Research on the role conflicts of mothers has pointed out the importance of the fulfillment of both the maternal self and the individual self, and the issue of this imbalance has been discussed in relation to mothers' own employment and educational backgrounds. However, the issue of how mothers balance motherhood and selfhood in terms of their appearance has not been discussed from a cross-cultural perspective. In light of these issues, this study analyzed gal-mama interview data. It became clear that the behavior of gal-mamas, who dress as they like, rather than as “mothers” in terms of appearance, while at the same time doing their best to be mothers in the practical aspects of child-rearing, is a practice of separating one’s appearance from one’s role and balancing the individual self and the self as a mother. This reinforces the conservative image of self-sacrificing motherhood.

Keywords: normality of mothers, image of appearance, conflicts